会　　議　　録

会　　議　　名	平成２７年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	平成２７年７月２８日（火）１８時３０分～２０時００分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志副会長 村澤　司委員 上田郁子委員 平岡良一委員		
欠　席　委　員	小林正隆委員		
事　務　局　員	学芸顧問　　薩摩雅登 コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、井上 　同　　はけの森美術館学芸員　中村、鈴木		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）展覧会「けんぼしゃんの夏休み」の観覧 （２）事業実施報告等 （３）提言の内容等について （４）その他		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	（１）開催した展覧会・ワークシップ等及び今後の予定 （２）平成２７年度年間スケジュール （３）ワークショップ等アンケート結果（一式） （４）提言（案）		

【鉄矢会長】　　平成２７年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。よろしくお願いします。

資料の確認をしたいと思います。

次第が１枚。それからホチキスどめ資料１、ホチキスどめ資料２、それから「おはなしのへや」というのが頭になっているホチキスどめのもの。「水彩で夏を描こう！」。それからもう一個「おはなしのへや」がありました。こっちを「おはなしのへや　２」としておきましょうか。それから「提言（案)」というのが最後にあります。また「けんぼしゃんの夏休み」ということでスケッチブックと所蔵作品展のチラシがあります。お手元にありますでしょうか。

では、次第に従って進めたいと思います。

所蔵作品展「けんぼしゃんの夏休み」の観覧は終わりました。

次に２番目、事業実施報告等ということで、事務局でお願いします。

【中村学芸員】　　では資料１をご覧ください。開催した展覧会・ワークショップ等ということで、資料に従ってご報告したいと思います。

まず企画展の「生誕１２０年　河野通勢と中村研一」展が５月２４日の日曜日で終わりまして、総入館者数が１,８２６人でした。参考までに、平成２４年の石川県立美術館の展示のときは１,８５４人で、平成２５年の「岐阜県美術館蔵　コレなんだ？　佐藤慶次郎のつくった不思議なモノたち」展が２,０２９人でしたので、来館者数としては特別多くも無く少なくも無くという状況でした。

関連企画としまして、学芸員によるギャラリートークが５月２３日の土曜日に開催しましたが、この日の参加者が１５人前後でした。後でまたご報告しますが、この日は同日に読み聞かせなどを行う「おはなしのへや」も開催しましたので、そちらに関してもまた教育普及事業のほうでご報告したいと思います。

続きまして、先ほどご覧いただいた所蔵作品展「けんぼしゃんの夏休み」ですが、こちらが７月１８日の土曜日から始まりました。今回、夏休み期間ということで、小中学生の観覧料は無料で開催しております。

関連企画の方にあります鑑賞ワークシートというのを今回皆様のお手元に配付しておりますが、この「わくわくスケッチブック」を来館してくれた小中学生にお渡ししております。展示をご覧いただいたと思いますが、キャプションのところにマークや、子供向けのキャプションなどがあります。そういったものを読みながら、スケッチブックのほうもやっていただいて、宿題などのプラスにしていただきたいということで配布しています。

続きまして、関連企画の１つとしまして、「こごうちぶんこ」にご協力いただいております「おはなしのへや」を今回の展覧会中も２回開催する予定で、１回目は７月２３日（木）に開催いたしました。

今回は試験的に対象を絞って開催しました。１回目は幼児と保護者を、２回目は小学生と対象を絞ることを考えております。まだ１回目しか開催していないのですが、すごく盛況で、３０人近くの方に参加いただいて、読み聞かせと簡単な工作を行いました。工作の内容については、「新聞で帽子をつくって、最後、切っていくと服になる」というような内容です。

やはり若いお母さんや、小さなお子さん連れの方にとって、夏休みの午前中の時間は動きやすいのだなと、何となく反応として感じました。ただ、幼児を対象にすると、展示をご覧いただくところまでつなげるのはなかなか難しくて、「これは子供でもわかりますか」と質問されたときに、即答しづらいところもあって、展示とどうつなげるかというのは課題かなと感じた次第です。

次の教育普及事業に関してもこのまま説明を続けさせていただきます。

①と②は、先ほどお話ししました企画展の「河野通勢と中村研一」展の開催期間中に行ったものですが、鑑賞教室ということで、南小と緑小に訪問していただいて行いました。

続いて②の「おはなしのへや」です。この日は対象を絞っていなかったのですが、先ほどの写真のように、幼児が多い感じではありますが、この日は３１人の参加がありました。このときはウグイスの笛をつくろうということで、フィルムケースに穴をあけて、ストローでふーっと吹くとウグイスの鳴き声になるというものなのですが、ちょっと難易度が高かったかなという感じです。

続きまして③のワークショップ「水彩で夏を描こう！」、これは単独の教育普及事業です。おととし２回開催しました、多目的講義室のオープン記念のワークショップで来ていただいた、アニメーション背景美術家の牟田いずみさんをお招きして、今回は夏らしい風景をみんなで描こうということで開催しました。

今回は定員数を少なくして、その分、密に指導を受けられるような形にしました。自分たちでアニメーション背景の描き方をじかに学んで、同じ道具を使ってというのは、すごく皆さん、満足度が高かったようです。こういった感じで皆さん１作品は描かれました。それ以上描かれる方もいました。

ただ、この日はすごく暑い日でした。この近くにお住まいではない方の参加も多くて、飲み物を持参されなかった方もいらっしゃったりしましたので、夏の時期には飲み物を持参してくださいというようなアナウンスも事前に必要だなと感じました。今後の反省点として生かしていきたいと思いました。

開催した展覧会・ワークショップの報告は以上です。

先ほどのイベントは全部アンケートをとっておりまして、それも配付しておりますので、こちらも後であわせて見ていただければと思います。

【鉄矢会長】　これはアンケートの結果ということですね。

牟田先生のところはリピーターが多いんですね。

【中村学芸員】　そうですね。過去２回参加された、中学生の方が今回もまた参加されました。本当はもう１名、２回目の参加の方がいらっしゃったのですが、キャンセルになりました。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

ここまでで何かご意見などは。

【山村委員】　ちょっと伺いたいのですが、２ページ目の③のワークショップ「水彩で夏を描こう！」、ですが、定員１５人＋抽選とあるのですが、応募は１５人以上だったということですか。

【中村学芸員】　過去２回は定員を超える応募があって抽選という形だったのです

が、今回は応募が１４人と定員を下回る結果となりました。
【山村委員】　　わかりました。
【鉄矢会長】　　さっき、「おはなしのへや」の後、幼児が作品を見てわかるんですかという話ですが、幼児がわかる・わからないではなくて、体感するということがすごく大事なのだと。美術館という静かな空間とか、ちょっと涼しい中でみんなが絵をじっくり見ている姿の中に自分があるというのは、小さいながらにそれは覚えていくことだと思う。そういうのが何回かあるだけでも、美術館への抵抗もなくなると思いますし、絵を見るとそういうふうに見るものだとまねしたりするようになるので、幼い子が作品をみることはいいことですよと言っていいような気がします。
【中村学芸員】　　わかりました。すみません、私がワークシートの説明をしたときに、その内容がわかりますかと聞かれて、それはちょっと難しいかなと思い、そういうふうに答えました。展示自体は、絵を感じていただくというのは小さい子でも勧められるなと思ったのですが。
【鉄矢会長】　　このワークシートは幼児にも配っているのですか。
【中村学芸員】　　小中学生のみなのですが、たまたま、「おはなしのへや」でお子様にも配っていますと私が説明しましたので、そのような質問がありました。私の説明が足りなかったという感じです。
【鉄矢会長】　　小学生は１年生と６年生で随分違うので。「小学生の中学年ぐらいから大丈夫ですよ」でいいんじゃないですか。
【村澤委員】　　ちょっと話が戻ってしまって申しわけないのですが、さっきの２ページの牟田いずみさんのワークショップですが、前回も同じ時期だったのですか。
【中村学芸員】　　前回も７月と１２月でした。
【村澤委員】　　７月は上旬。同じぐらいの時期。
【中村学芸員】　　同じぐらいの時期でした。
【村澤委員】　　もしかしてと思ったのですが、中学生だとこの時期は試験じゃないかなと。下旬だったら試験が終わってというところがあったので、前回はどうだったのかなと思ったのですが。
【中村学芸員】　　ちょっとそこまでこちらも把握していなかったというか、中学生だけを対象にしていたわけではなかったので。今回、展示の休館中に行うワークショップで、講師のスケジュールもあってこういった日程になったのですが、今後はそれも考慮します。
【村澤委員】　　前回の日程をちょっと調べていただければと思います。
【中村学芸員】　　わかりました。
【上田委員】　　中学生はもう期末テストは終わっていますね。７月上旬には大体のところは終わっているのではないかと思います。でもそれ、調べるの大変ですよね。
【平岡委員（館長）】　　逆に、６月のほうが厳しい感じですかね。
【上田委員】　　試験の前と後、どっちに来るかといったら後に来るでしょうから、６月末だと厳しいですかね。
【山村委員】　　あと、これは聞くだけですが、「こごうちぶんこ」の読み聞かせの中で、笛をつくったり新聞紙で帽子をつくってそれが服になったり、鳥の形の工作を

やったりというのは、「こごうちぶんこ」さんのレパートリーというか。

【中村学芸員】　　そうです。「こごうちぶんこ」さんがこういったものをつくるのはどうですかというご提案を受けて、了承したり、それを受けてこちらから提案したりする話し合いをしていますが、基本的には向こうが教えられる題材のものを選んでやっていただいています。

【山村委員】　　それを読み聞かせと絡めて。

【中村学芸員】　　そうです。今回の新聞紙の帽子は、「大きくなったら何になる」という歌がありまして、それで消防士さんの帽子だったり、船長さんの帽子とか、最後は何とかの服とかいうふうに歌ってつくっていくんです。なので、その前に職業の話に近い絵本を紹介したり、季節にちなんだ本を読んでくださったり。あと、今回はまだ行われていないのですが、展示の内容と絡めたものも行っていただいたり、内容はそれぞれ相談して決めています。

【山村委員】　　おもしろいなと思って。

【鉄矢会長】　　では、２番の事業実施報告等の「等」の部分は、今後の予定も入るんですね。

【中村学芸員】　　はい。では資料１の３ページから、引き続きご説明いたします。

今後の開催予定の展覧会の、「けんぼしゃんの夏休み」の関連企画としまして、８月の火曜日に、美術館で模写・スケッチ曜日というのを今年度も開催いたします。昨年は猪熊展で模写を行ったのですが、毎年この時期は夏休み向けということで模写を行っておりまして、今回の展覧会でも８月中に開催する予定です。

続きまして鑑賞＋創作プログラムということで、これも子供向けのプログラムですが、２回開催いたします。１回目が「線であそぼ！」、２回目が「色であそぼ！」ということで、今回は展示作品を子供たちと一緒に見た上で創作活動も行うというプログラムです。

これは「えほんとあそぶアートのおうち」というユニット、絵本などの研究をされている方で、女子美術大学で講師をされている藤田百合さんと、赤松千佳さんと妹尾喜久子さんの３人に講師として来ていただきます。中村研一の展示を見て、絵本を読み聞かせて、工作もするという、結構盛りだくさんな内容になっております。

線と色ということで、今回は作品を見るに当たっても１つキーワードを決めて鑑賞していくような形になりますので、それに合わせて、３人の講師の方が作ってくださったこのワークショップ用のワークシートを活用して行う形になっています。

対象が５歳から小学２年生ということで、ごく小さいお子様も、美術館は初めてというお子様もいると思うのですが、美術に触れる入り口になるようなプログラムにしようということで、８月２日と８月２３日に開催予定です。

今回の展示が終わった後に、次回の企画展として「生誕１００年　串田孫一」展を１１月３日から来年１月１７日まで開催予定となっております。関連企画として既に日程が決まっているものが、駅前にある小金井宮地楽器ホールとの連携企画ということで、小ホールでトークイベントを行う予定です。ほかにも、ギャラリートークやギャラリーコンサートなども開催予定となっておりますので、また内容が決まり次第、次回の運営協議会でご紹介したいと思います。

最後に４ページ目、鑑賞教室ですが、小学校が７校、串田展の開催期間中に見学に来られます。既に何校かは事前授業をやってほしいというお話があったり、研究授業で串田展と絡めることができないかというお話もいただいています。この間の猪熊展のときにもそういったことを開催して、とても子供たちの理解が深まったという意見をいただいたので、積極的に学校と連携していきたいと思っております。以上が開催予定の展覧会・ワークショップとなります。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

ここまでもう一度、予定も含めてご質問等はありませんでしょうか。

【上田委員】　１ついいですか。「えほんとあそぶアートのおうち」の方たちのワークショップでは、参加費はなくて要観覧券になっているのですが、「こごうちぶんこ」が行っている「おはなしのへや」の方は、観覧券は要らないですよね。これはどういう取り決めというか。「えほんとあそぶアートのおうち」は展示室で作品を見て制作等を行うからということですか。

【中村学芸員】　そうです。必ず展示を見るので要観覧券になっています。

【上田委員】　仮にこの方たちのワークショップが展示室の作品を見ないものだとしたら、こちらも観覧券は必要ないということですか。

【中村学芸員】　そうですね。観覧券は、見られる場合には買っていただく形になるのですが。

【上田委員】　つまり、この鑑賞＋創作プログラムの内容が、もし展示作品と関係ない場合、展示作品を見に行くのだったら観覧券をご購入くださいという形になるということですか。

【中村学芸員】　そういう形では開催する予定がなかったので、そこまでの発想がなかったのですが、そういう形で「おはなしのへや」は分けています。

展覧会の内容にリンクした関連企画だと、必ず展示を見てもらいたいという気持ちがありますので要観覧券ということで開催しています。「おはなしのへや」自体は、今回は展覧会の関連企画に入ってはいるのですが、美術館がレギュラー企画として行っているという部分もあって、展覧会に必ずしも内容を近くしているというよりは、美術館に来ていただくための足がかりとしてやっているところがあります。なので、それに関しては、展覧会の関連企画としても無料という形で、観覧料は取らずに２階から入館いただくような形にしています。

【上田委員】　展示を見る方は観覧券を買ってもらっているのですか。

【中村学芸員】　はい。展示を見る方には別に観覧券を買ってもらって入ってもらうというのは通常どおりやっています。

【上田委員】　この「おはなしのへや」は、知り合いがやっていたりするので何度もお手伝いに来たりして、状況は実際に見せてもらっているのですが、観覧券を買って美術展を見に行くというシステムが、先ほどもおっしゃっていたけれど、どうもあまりうまくいっていないように見受けられて。観覧券をここで買えるんだということや、そちらの美術展を見に行く流れみたいなものが、どうも来ていらっしゃる方たちにはピンときていないというか。全くこの美術館と「おはなしのへや」が、２階の多目的講義室でやっていると思うのですが、切り離されているみたいな印象

がある。印象があるに過ぎないのですが。あまり踏み込んでいないので。
　そういうふうに見受けられたので、こちらの鑑賞＋創作プログラムのほうで要観覧券というのができるのだったら、「おはなしのへや」ではどうなのだろうなと思ったので。
【中村学芸員】　　わかりました。検討したいと思います。
【鉄矢会長】　　「おはなしのへや」の参加者は来館者数にカウントされているのですか。
【中村学芸員】　　カウントの仕方としては、「おはなしのへや」に参加した人数ということで別カウントです。
【鉄矢会長】　　美術館利用者としては。
【中村学芸員】　　カウントの仕方は、観覧料を払った人をカウントしています。
【山村委員】　　どこの美術館でも、展覧会に関連して要観覧料のプログラム、ワークショップと、観覧料は別に切り離しになりますという、その２種類は必ずあります。大抵ここよりはもっと規模が大きいので、あまり気にならない。展覧会の入館者は展覧会の入館者で、無料有料を含めてカウントして、教育系は教育系でカウントして、両方を足して利用者としているので。
【平岡委員（館長）】　　統計上は、展覧会に来た人、ワークショップに来た人というのを別々にカウントしていて、最終的にここに来た人の合計という数字を出していて、別々の表で終わっているというのが今のうちの統計なので、展覧会は展覧会として来てくれた人というカウントになります。
　そういうやり方をしているので、逆に今回の鑑賞＋創作プログラムということになった場合は、多分、１人で観覧料を払って見てもらってワークショップも参加すると、１・１でカウントされるというふうになると思います。
【山村委員】　　全体を足してその利用者というふうにしても全然おかしくはない。それはダブルカウントとは言わないのではないか。実際、教育普及活動をやって、展覧会も見ているので。
【吉川係長】　　たまたま系統が似ているのでそういうふうに思われてしまうかもしれないのですが、さきほど中村が言ったように、「こごうちぶんこ」を始めたときは、まず美術館に小さい子を連れて来られるようにということで、本当は「こごうちぶんこ」に子供を預けておいて、お母さんは展覧会を見てほしいというのがずっと理想にあります。そのアナウンスはしていると思うのですが、やはりこれまで慣れ親しんだ、子供と一緒に工作をするとか絵を描くという親御さん本人の意思もあって、そこがまだ、そういうやり方もできるということが浸透していないのかなと感じます。
　それだけではなくて、さっきちょっと思いましたが、「はじめて美術館」ではないですが、赤ちゃんを連れて、ちょっと赤ちゃんが泣いても大丈夫だよという、そういう時間帯をもしかしたら設けてもいいのかもしれないなと思いました。
【山村委員】　　多分、今はそういう需要がすごく多いと思います。乳幼児から、小さい子を連れてお母さんが行くところがないという。だから、需要に応えるのも大事なことだと思います。

【吉川係長】　　そうですね。将来の来館者に育ってもらえれば。
【鉄矢会長】　　では、次第の３です。提言の内容等についてということで、会長名で私の名前になっていますが、下書きは山村先生、ありがとうございます。準備稿のほうで。説明を事務局から。
【吉川係長】　　前回、提言をということをご提案させていただきまして、山村先生からもご意見をいただきまして、薩摩学芸顧問から、会長にも案というところはご了承いただきながら、まとめさせていただきました。
　提言のほうは、あまり長くてもいかがなものかということでしたので、４点に絞りまして、別紙として評価と課題を添付する形にまとめました。
　提言案及び評価と課題の内容は、山村委員のご意見から抜粋になっております。今、現状では、見ていただくと提言案と評価と課題で共通している部分もございますので、全体の構成や文章の構成、追加や削除なども含めまして、この案に対するご意見をこの場で出していただくなり、これから会長との打ち合わせで、お持ち帰りになってご意見をまとめていただければと思います。まずは議論をしていただくのが先決かと思いますが、こんな形で提出したらどうかということで、議論のほうをよろしくお願いしたいと思います。
【鉄矢会長】　　では、３分か５分程度、一回皆さんにしっかり目を通していただいて。

―　委員各自で一読　―

【山村委員】　　それで、私の方でわかっていないところも結構たくさんあったので、今日は色々な形で見ていただいて、足していくように。そこにも書いたのですが、お願いしたいと思っております。
　例えば、この中には評価の部分で、「こごうちぶんこ」との連携だとか、あるいは美術鑑賞教室によくやってきた人とか、抜けているところもあるので、単純にそういうところも入れたほうがいいんじゃないかなと思っています。
【鉄矢会長】　　ありがとうございます。
【村澤委員】　　ちょっとよくわからないところがあるのですが、企画展をやる場合の期間というのは、何か作品を借りてきてやれると思うのですが、その期間の日数で決まるのですか。それとも、いつからいつまで貸し出しますという決め方なのですか。
【山村委員】　　いつからいつまでをというのが普通です。見せる間、これだけ展示しないから、それだけ長く貸してくださいというのはあまりないです。
【村澤委員】　　じゃあ、９０日間とかではなくて、７月１日から９月末までとか、そんな感じで決まる。
【山村委員】　　そういう感じで決まります。
【村澤委員】　　じゃあ、週２日にしても、それによって、この前先生からもお話がありましたが、土日が増えるということで観覧者が増えるだろうということですよね。
【平岡委員（館長）】　　多分、週５日の、この間、薩摩学芸顧問からいただいたお話でいきますと、週６日のところを５日にする代わりに、会期自体を延ばそうと。６

日間よりも５日間にして会期自体を増やした方が、土日が入ってくる数が増えると。おのずとそうなるだろうというようなお話だったかと思います。

なので、今回の中にも書いてあるとおり、展示替えの休館期間を圧縮して、その分会期を延ばしていくという形の書き方になっているので、展覧会として借りる場合は、先ほど言っていた７月１日から９月末までを、７月１日から１０月末までに延ばして借りるというイメージになるかと思います。

【村澤委員】　これによって賃借料とかは発生するのですか。

【平岡委員（館長）】　借用料自体が発生するような企画は、今のところ、この館ではやっていないかと思います。

【村澤委員】　無償で借りてきて。だから費用の点にも影響はないと。

【平岡委員（館長）】　そうですね。貸していただけるのであれば、基本的に貸し出し料についての影響はないです。

【村澤委員】　あと、細かいことなのですが、「言語道断」という文言はちょっと言葉が強いような気がするのですが。

【山村委員】　これについては、「ただ所蔵品展だけやっていればいいというのではなく」という意味合いを強めようとした表現となっています。

【鉄矢会長】　私もこれを読んでいて気になったのが、どこかから、所蔵品展だけやっていればいいんじゃないのと誰かが言ったのが前提で話しているような気がしていて。それは本当は耳に入っていないという話でスタートしないと変なのかなと。

【山村委員】　そうですね。なくてもいいんですけれど。

【薩摩学芸顧問】　この２枚にまとまった提言自体はよくできていると思うんです。あまり項目を増やしても返って効果がないし、あまり文章が長いと読んでもらえないし。だから、場合によっては、こういうのは何人かの人を通したほうが、文章がやわらかく客観的になっていきますので、本当は、時間があれば、今日の会議の前に、私でもう一回直したかったのですが、中々時間もとれなかったので、ここは私がもう一回、早いうちに手を入れて、もう一回やっていきたいと思います。

だから、もしも項目をもう少し増やした方がいいとかがあれば言っていただきたいと思いますし、あと、評価と課題の方はどういうふうにまとめていくのか。提言と評価と課題との整合性というか、あるいは重複というか、この辺をどう整理するかですけれど。

今は、まずはこの中で述べられていない、もうちょっとこれを言ったほうがいいのではないかというのがあれば言っていただけるとありがたいと思います。削るほうはそんなに難しい仕事ではないので。これを忘れていた、というのが困るので。

【鉄矢会長】　小学生に長年鑑賞教室をやってきて、既に延べ何人の市民がここでこういう教育普及を受けたという表現はできるのかなと思って。

【中村学芸員】　それは鑑賞教室に来た生徒の人数の累計ということですね。

【鉄矢会長】　そうすると、ある年齢層で種まきしているよ、という話というのは強いのではないかなと思うのですが。

【中村学芸員】　一応、毎年何クラス何人参加したというのは記録しているので。

【鉄矢会長】　何年から何年で、延べ何人の。例えば、小金井市の何年からの小学

生は１００％なんですよね、ここに来ているのは。
【中村学芸員】　　そうです。
【鉄矢会長】　　それってすごいことですよね。小学生の１００％がここで教育普及を受けているというのは。
　でも、ここでそういうトレーニングがあるから、すごくこれから文化度の高い市民、美術とのかかわりをおもしろがれる子ども、中学生や高校生が増えるというふうに期待できるというのはあるのだろうなと。
　あと、学校の先生との連携で何かありましたよね。学校の先生の研究会。
【中村学芸員】　　はい。去年。
【鉄矢会長】　　市内の図工研ともやっているんでしょう。
【中村学芸員】　　図工研の方とも年に１回はここで開催してもらって、ちょっとお話を聞いたりとか、一緒にプレワークショップみたいな感じで、「佐藤慶次郎」展の時などは磁石で工作をしたりというのは、やっています。
【鉄矢会長】　　それはすごくすばらしい活動なのではないですか。
【山村委員】　　ですから、今、薩摩学芸顧問がおっしゃったとおり、提言としては２枚でまとめて、参考資料として別紙で評価と課題ということで。評価だけでいいんですかね。
　要するに、「記」の、最初の前文のところを具体的に一段で並べたいというところがあるので。評価と課題でいいですかね。ここも箇条書きでざーっと書いてしまっていいかなと思って。あくまでも参考資料ということで。今おっしゃった図工研との連携とか、さっき言いましたが美術鑑賞教室のこれまでの実績だとか、「こごうちぶんこ」との活動とか。それから、学芸大学とも連携していますよね。そういうのも全部箇条書きで書いてもらえませんか。ちょっと、私もあまり時間がなくて、全部調べて書くというのはなかなか。
【鉄矢会長】　　特に評価のところが、半分ぐらい数値的な評価があるほうが、見た目はいい気がします。相当やっている、大変努力している、とかが並ぶよりは、ちょっとそういう、ポイントとして、１００％の何かをやっているとか。
【吉川係長】　　さっきの、小学４年生を対象とした鑑賞教育は、すごく数値的には出しやすいですし、何年からやっていて、何歳以上は１００％美術館に来てると言えるはずです。
【山村委員】　　教育普及事業について、そんなふうにいろいろな要素があるし、企画展についても、本当に助成金なども実績としてよくとってきていただいているし、中身的にもすごく評価できるし。
　企画展に関しては、特別展については特にアートフルアクションとの連携とかもありますよね。それから他の美術館とか。これも助成金のほうに入るかもしれないけれど、地域創造との連携とか、それを通じた他の美術館との連携とか、そういうのもいちいちここに入れていったほうが。そんなに工夫して、努力して幅を広げていっているのだというのをアピールするのにいいのではないかなと思うんです。そういう要素をどんどん挙げていくと、人とか人件費だとか、もうちょっとお金をかけることによって、せっかく芽が出ているのに、もう少し伸ばして、水をやっても

いいんじゃないの、みたいな気持ちが、読んでいる人に自然に起きてもらうといいかなと思っています。

【鉄矢会長】　「総体的に見て、これだけのスタッフと予算の中で美術館として相当に健闘していると言える」という表現のところですが、「総体的に見て、この少数のスタッフと」と。「これだけすごいスタッフ」ではなくて、「この少数なスタッフ」という意味を、しっかりそれが明快に少ないと書いてあげるのと、「活動は相当に無理を強いている」ぐらいの話なのか、これはいい表現ではないと思いますが、ただ、本当に頑張っていると思うのですが、それでいつもぱんぱんになっていく人がいるのでは困るなと。増加の形には今なっていない、という表現が適切なのでしょうか。向こうにちょっとだけぐさっと刺さらないと。持続可能な形になっていないというのはありますよね。課題のところですかね。

【山村委員】　まあ、運営協議会の整合性がどうとか、ちょっと抽象的になってしまいますけれど。

【村澤委員】　この前いただいた資料の中で、人数表が出ていたんですよね。多摩地区の常勤学芸系職員数ですか。それはちょっと古くて、平成２２年度のものですけれど。やはりこの、常勤学芸系職員数がゼロというのがここだけという。数字の中でも出ているので、こういう表は入れていただいてもいいかなと思うのですが。

【山村委員】　そうですね。前回と同じですからね。

【上田委員】　表現が難しいのだったら、数字で出すのは有効かもしれないですね。

評価の中に、教育普及事業と企画展覧会とあって、３番の所蔵作品展というのはなくてよろしいのでしょうか。

【山村委員】　そうですね。あったほうがいいですね。企画展覧会と所蔵作品展、両方並列でもいいのですが。

【鉄矢会長】　所蔵作品展と企画展覧会が一緒であって、あとはやはり研究紀要を出したりというか、年報、５年報、３年報もありますし、あとは、発掘してきた作品をいろいろなところから受け入れて、それをちゃんと評価して受け入れていく、評価委員会も含めての美術館の所蔵の増やし方とか、その辺の学芸員としての研究、学芸部門の研究部類をもう少し評価できるようなものが欲しいですね。

【薩摩学芸顧問】　新収蔵品は書いたほうがいい。美術館ができてからどのぐらい収蔵されてきたか。その中には特に非常に重要な作品があるので。戦争画が２点も出てくるとは夢にも思わなかったので。

【鉄矢会長】　そうですね。あと、戦艦に乗っかっていた作品もありますしね。

あと、やはり企画展のほうで、小さな美術館展みたいなネットワークが生まれているというのは。中村研一の故郷のところとか、そういうネットワークが生んでいるものというのはいいのだろうなと思います。

【山村委員】　所蔵作品展については２番に企画展覧会と並列で入れてもらって、それから３番に調査・研究、広報その他みたいなものを。これまでの評価に、３番目として入れてもらって、その調査・研究、広報その他で、年報の発行とか、今おっしゃった新収蔵品の発掘というか、そういうのをそこに入れてもらうということで。年報の発行のほうは確かに評価になるのですが、逆に研究紀要的なところはそ

こに加わってほしいので、それは課題ということになるかと思います。
【鉄矢会長】　　でも、今の体制だと、それを課題というのもちょっと忍びない気がするのですが。
【山村委員】　　でも、そこは本当に、美術館の軸になってくるものなので、入れましょうよ、評価と課題で。
【鉄矢会長】　　項目として、教育普及と展覧会、展示の部分と、３番目に調査・研究があって、４番目ぐらいに運営というのが。この、下の課題と対応するとすごくわかりやすいのかなと思って。教育という部門についての課題は何なのか、展示に関しての課題は何なのかといったら、借りにくいとかいう話も出てくるのかもしれないですし。運営に関しては、さっき言った人数と開館日の話とかその辺が出せると。その他の部分で広報の話が出てくるような。
【吉川係長】　　同じ項目で行くということですか。同じ項目で、評価と課題と。
【鉄矢会長】　　はい。そうすると、評価はしているけれどこういう課題があるのねというのがわかりやすい。
【平岡委員（館長）】　　「運営全般」とか、そんなような項目があったほうがいいと。
【鉄矢会長】　　そうですね。４番目に運営があって。
【山村委員】　　確かに、広報は運営と一緒に書いてもいい。
【平岡委員（館長）】　　そうですね。調査・研究で１つにして、広報、その他運営全般みたいなのがあったほうがいいですね。
【鉄矢会長】　　美術館の認知度ってまだまだなんですか。
【吉川係長】　　認知度の目標をどこに持ってくるかですね。
【平岡委員（館長）】　　認知度も測るのがなかなか難しいですけれど、評価の方にもつながってしまうのですが、毎年１学年、小学生の鑑賞教育を行っているというのは、子どもから親に伝わる認知度というのも結構あるのですが、市内でもなかなか、知っている人と知らない人がいるという状況はまだ続いていますので。
【鉄矢会長】　　何という表現が一番適切なのかなというのは。
【山村委員】　　客観的な認知度を測る指標というのはなかなか。
【平岡委員（館長）】　　あと、市民の認知度なのか一般的な認知度なのかというところもまた一つ難しい。どっちも欲しいといえば欲しいのですが、難しいところではあります。
【山村委員】　　広報をやっていると、絶対両方必要ですね。市民に流す広報はすごく重要だし、それから、やはり業界での認知度というか、美術館業界とか美術業界の中での認知度というのは結構大きいので、両方ないと、両方うまく伸びないです。外で評価されているから市の人が来ることもあるし、市の人が来ているから外の評価が高まるということもありますから。
【鉄矢会長】　　ちょっと話が戻ってしまうのですが、評価の中で、展覧会をやりながら美術館という枠ではなくて、もう少し大きな枠で動いた、あの、「タマのカーニヴァル」。あれ、楽器を使ったりワークショップをしたりしませんでしたっけ。
【吉川係長】　　そうですね。全部やりました。
【鉄矢会長】　　やりましたよね。ああいうのも、だからかなり高い評価なのではな

いかなと。
【吉川係長】　　あの取組は、市の計画とのつながりで、トータルで全部見られる、美術館は美術館だけではなくて、いろいろなことを市民が興味を持ってほしいということを計画の中でうたっているので、それでつなげたものです。
　今後もそのようなことはやっていきたいと思っていますし、今年、文化庁から助成金をもらっているのは、そのような取組が評価されてもらっているので、そういうことは今後もやっていきたいな、やっていかなくてはいけないなと思っています。
【鉄矢会長】　　美術館の評価として、評価をするのに、美術館が美術館の枠を超えていくというようなことに出ていっているというのは、今、抜けているなと思ったんです。今までの美術館と同じような、館内でやる展覧会、館内でやる研究、館内でやる何とか、というだけの美術館ではないような気がしているので、そういうのも。
【吉川係長】　　先ほど山村先生がおっしゃった、アートフルアクションと連携ということで、地域と連携するとか学校と連携するとかいう、その辺の評価ですよね。
【鉄矢会長】　　これはいつ出すというのは決まっているのですか。いつまでに出さなければいけないというのは。
【吉川係長】　　事務局としては特に時期を決めるものではありませんが、予算編成の前というのも一つのタイミングではあります。ただ、きちんと煮詰めて出したほうがよろしいと思いますので、もう一回これを次の運協にかけるという形のほうがよろしいですか。
【薩摩学芸顧問】　　予算の前だとするといつまでですか。もうすぐですよね。
【薩摩学芸顧問】　　だったら間に合うんじゃないかな。
【山村委員】　　９月末に出せば予算の反映というのはできるよね。
【平岡委員（館長）】　　反映という言葉が適切かどうかは分かりませんが。
【吉川係長】　　手続に要する時間の短縮ということでしたら、この案にていただいた意見でもう一回、事務局にて直したものを皆さんにお送りして見ていただいて、特にご意見がなければ委員長に一任というような形もとれるのではないかと思います。その場合は、次の運協を待たずに９月末日に出すこともれきるのではないかと思います。
【山村委員】　　提言自体は、ほぼこれでいいんじゃないかな。１ページ、２ページ目は。多少、さっき出ていた意見について反映できれば。
【吉川係長】　　文言の修正ですね。
【山村委員】　　ええ。それでやれば、提言はＯＫだし、できますよね。それで、評価の方は、今日、出たような意見を箇条書きで書いてもらえば。あくまでも資料なので。
【薩摩学芸顧問】　　順番として、お手数ですがもう一回、事務局で今日の意見を入れてまとめてもらって、私がそれをもう一回ちょっと確認等を行って、そして皆さんに送って。
　ただ、この４番の次回運営委員会の日程調整と絡みますが、うまくいけばもう一回、次回の運営委員会に出せるかもしれないですね。それは次回の委員会がいつに

なるかですけれども。
【鉄矢会長】　　では、これに関する、提言への意見交換は一回ここで。あと、その他がありますので、それをちょっと棚上げにしておいて、次回運営委員会の日程を。
【平岡委員（館長）】　　例年ですと大体１０月下旬ぐらいを目途にやっています。ただ、できれば展覧会の会期中にお願いしたいという思いもありますが、今年は１１月中に市議会が開催されるかと思いますので、私と指導室長が出席できない可能性もあります。
【鉄矢会長】　　先ほどの予算の前までというと。
【平岡委員（館長）】　　予算要求は、例年ですと１１月の１週ぐらいが締め切りになると思います。
【鉄矢会長】　　提言が効きそうなのはいつごろですか。１０月ですか。
【平岡委員（館長）】　　予算要求時期に焦点を当てるのであれば、１０月中旬～１１月中旬ぐらいまでにまとまっていれば、予算要求時の参考資料となるとは思います。
【吉川係長】　　以前に、１０月の展覧会のないときに市役所を会場として開催したこともあります。それは皆様のご都合と、進捗状況によるかと思います。
【山村委員】　　私の意見としては１０月の初めに運営協議会を開催して、もむというよりは、ほぼそこで了承するような形で。
【吉川係長】　　では、それまでに、皆さんに先にお配りできるような形にはしたいと思います。
【平岡委員（館長）】　　市の全体のスケジュールの関係もあると思うのですが、市議会の開催状況などを考えますと、１０月の第３週以降にしていただけると助かります。
【鉄矢会長】　　じゃあ、１３日の１８時３０分で。それまでに、かなり早いときにもう一回送れると思いますので。
【薩摩学芸顧問】　　いつも第４回はいつごろでしたっけ。
【吉川係長】　　第４回は１月ぐらいです。１月１７日までの間に。
【薩摩学芸顧問】　　１７日まで串田展をやっていますから、その終わる直前ぐらいに入れれば。
【平岡委員（館長）】　　そうですね。
【鉄矢会長】　　ということで、一度、とめておりました提言案について、まだお話し足りない方は。無ければまたしばらく、事務局の方に。
【吉川係長】　　はい。ご意見があれば、いただければありがたいです。
【薩摩学芸顧問】　　そして、申請のうちにまとめてくだされば、また私が。
【吉川係長】　　では８月の２週目ぐらいまでに。
【山村委員】　　８月８日までに、何かあればくださいと。
【鉄矢会長】　　次回運営委員会の日程調整もできました。その他、何かございますでしょうか。
【上田委員】　　済みません、今のことですが、８月７日までに何か提言とか課題とかの案があれば、事務局にご連絡すればいいということですか。
【吉川係長】　　はい。

【鉄矢会長】　　ほかにございますか。

　では、なければこれで第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会を終わりにしたいと思います。御苦労さまでした。ありがとうございます。

――　了　――